



カマロに入った  
1台のカマロ。毎年  
式のこのモデルが今  
少しずつ組み上げら  
れている。メカニッ  
クは、レッドライン  
の羽生氏。彼が本格  
的にレストアしよう  
と思ったのはワケ  
がある。それはこの  
カマロの持つストー  
リー。一言でいえば  
「素性がいい」とい  
うこと。もともとはカリ  
フォルニアで乗られ  
ていたように、当時  
の整備記録やメイン  
テナンスに出した領収書、その他登録はな  
どもそのまま残っている。乾いた大地と温  
暖な気候はこのクルマを蘇らせることがな  
かった。そしてこれが日本に渡ってきたの  
は10年ほど前の話。ここでも幸運にめぐま  
れる。日本でこのカマロを手にしたオーナ  
ーはオリジナルの真さを大事に乗っていた  
らしく、大膽なモディファイはされていない。  
現在でも、モールやエンブレム類まで  
ほとんどがオリジナルパーツというクワッド  
コンディションを保っている。マニユアル  
トランスミッションだが、エアコンなどの  
快適装備もあるのがうれしい。内装も年式  
から見れば侮みはほとんどない。数多くの  
オーナーによって乗り継がれてボロボロに  
なってしまったクルマとはひと味違う。さ  
らに羽生氏が面白かったのは、358キュー  
ービクインチのエンジンを搭載したSS  
モデルという点。ヒストリックカーとして  
人気も値段も高い2種モデルばかりが目  
ざれているなか、ひとつグレードが低いS  
Sという選択はホットというよりはクール  
だ。現在はトランザムレース用のミニライ  
トのホイールを履いて、ちよつびリレーシ  
ーナを曲駕を持っている。当初はスノコカ  
マロのようなレーシングカールックを思っ  
ていた。しかし、気分次第でオリジナルに  
近いカタチに仕上がるかもしれないと羽生  
氏は言う。どのようにフィニッシュするが  
迷わせるのもカマロが本来持つ魅力だ。日  
日クルマのカスタムで悩むことは楽しい作  
業。真つ黒になったエンジンを少しずつ磨  
いていく、ゆっくりとタイヤの磨石が磨き  
出す。再びこのカマロがストリートに飛び  
出す日は近かった。



# Camaro Attack!